

第26回「日韓高校生交流キャンプ」参加生徒の感想文 ④

「私たしたちの文化交流」

大槻 涼葉

慶應義塾女子高等学校 3年



プログラム開始直前に、韓国ホワイト国除外について閣議決定がなされ、日韓両国の関係は戦後最悪の状態であると連日報道されていたこともあり、多少の不安を胸に渡韓しました。しかし、ホテルの会場の扉が開くと同時に、そわそわしていた日本人参加者に降り注いだ歓迎の拍手と歓声は心にグッとくるものがあり、キャンプ終了後の今でも鮮明に覚えています。

最初は緊張からか無言の時間もよくある静かなチームでしたが、チームでのポスター制作や職場見学、事業案作成などを通してその仲は日に日に深まっていき、最後の夜には皆で涙が出るほど笑いあえる関係になっていました。

私たちのチームは食品をテーマに、食品ロスや食品廃棄の問題に着目した事業の提案を行いました。事業の話し合いは、日本語が達者な韓国人の子がいてくれたおかげもあって、メンターさんが少し席を外していても意見交換はどんどん進みました。脱線し始めると気づかせてくれる人がいたり、

皆の意見を包括してくれる人がいたり、自然とバランスよく役割が分担されていた気がします。

発言する時は頭ごなしに否定するのではなく他の人の意見とどうにかして組み合わせられないかと考えてみたり、自分の考えが素直に口に出せて、かつ皆の発言からは相手への思いやりが感じられる、とても有意義な時間でした。言語を共有しないからこそお互いを気遣い思い合う心が自然と皆の中に芽生えたのではないかと思います。通じ合えた瞬間、分かり合えた瞬間の喜びは忘れられません。メンターさんは、常に数手先を見据えて私たちと向かい合ってくれました。介入しすぎず、でもずっと側で支えてくださり本当に感謝しています。

この5日間は、今までにないくらい早く過ぎていきました。事業発表の準備や企画して下さったイベントなどが盛りだくさんの毎日は、息をつく暇もなく、気づけばお別れの時間でした。徹夜明けの発表会があった4日目も、最後の夜が惜しくて結局遅

くまでチームの皆で遊びました。お互いを
知り、お互いの国を知り、仲を深めるには短
すぎるようにも思いましたが、事業発表へ
の努力と様々なアクティビティを通して今
後も繋がっていたいと思える友達に出見え
た実のある時間でした。

キャンプを通して、韓国の方が、日本語で
伝えようとしてくださる行為に非常に感銘
を受けました。自国の文化の何かを相手が
共有してくれることがどれだけその人にと
って寄り添う力になるかということ、身
をもって体感しました。韓国語を勉強して、
私自身も思いを伝えたいと強く思いました。

日韓関係が非常に厳しいと言われている
状況で、タイムリーにこのキャンプに参加
することが出来て良かったと心の底から思
います。現地に行ってこそわかることがあ
るということは今までにも痛感してきまし

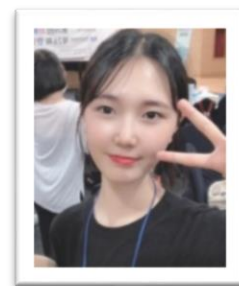
たが、今回こそその言葉が最も響いて聞こ
えます。国同士の政治的な経済的な確執は
これまでの歴史が絡まり複雑化を極める一
方ですが、次世代を担う私たちの、微力なが
らもお互いを知ろうとする気持ちが、また、
こういった草の根文化交流が、これからも
ずっと続いていくことを心から願います。

日本と韓国という2つの立場だけでなく、
韓国人同士、日本人同士も、各地からそれぞ
れが集まり、このキャンプなしには出会う
こともなかったであろう仲間です。このキ
ャンプで培った尊い友情と国際理解への灯
火を決して絶やすことなく、大切に、これか
らの日々に活かしていきたいです。

最後に、このキャンプの開催、運営にご尽
力いただいた全ての皆様に心より感謝申し
上げます。非常に貴重な機会を設けてくだ
さり有難うございました。

「真夏の四泊五日の夢」

金 掣允 (キム・ナユン)
倉洞高等学校 2年



キャンプに申し込んでから、私は本当に
心が浮き立っていた。しかし、キャンプ当
日、出発が近付いてくると、日本語もうま
く話せないのに、4泊5日間をどう過ごせ
ばいいか心配になってきた。ドキドキしな

がら日本の学生を迎えた。一緒にワークブ
ックを見ながらつたない日本語と韓国語、
英語で言葉を交わした。コミュニケーション
をとることが本当に大変で、参加する前

に日本語の勉強をちゃんとしていなかったことを切実に後悔した。

4泊5日の間、たくさんのプログラムがあったが、その中でも両国の伝統衣装ファッションショーに参加したことと、特技披露の時間が一番記憶に残っている。私は浴衣を着た。浴衣は学校の日本語の授業で着たことがあるが、下駄は初めてだった。足指が痛くて歩きにくかった。小股で歩きながらみんなの前でポーズをとったりした。本当に恥ずかしかったけれど、面白い経験だった。

合宿やキャンプなどに参加すると、特技披露の時間に自ら申し出る人はいつも少ないのを見てきたので、今回だってそうだろうと思っていた。しかし、たくさんの人が参加していてびっくりした。一人の日本の学生がピアノで「レモン」を弾き、それに合わせてみんなで一緒に歌を歌った時には、涙が出そうになった。最近日韓関係がギクシャクしているのに、私たちは一緒に笑ったり、歌ったりしているのがなんだかすごく感動的で、言葉にならない不思議な気持ちになった。夜は、日本の友達に韓国のゲームをいくつか教えてあげた。とても楽しんでもらえて嬉しかった。

最後日、別れの時間がやってきた。最初は4泊5日は長いと思っていたが、あっという間に過ぎてしまい、まるで夢のような時間だった。友達と別れるのが本当に寂し

くて、涙が止まらなかった。来年センター試験が終わったら、みんなで日本の大阪で会おうと約束しながら、別れの挨拶を交わした。

最初は、お互いにぎこちなかったが、4泊5日の間、友情も深まったし楽しくて幸せだった。中学生の時からいろんなキャンプに参加してきたけれど、外国人の友達と一緒にだったキャンプはこれが初めてだった。日本の友達と直接話し合えず、通訳の方に助けられながら会話をしたのが一番悔しい。今度日本の友達に会う時には、直接会話ができるように、日本語の勉強を頑張ろうと思った。また、事業アイテムを構想しながら、日本の文化、現在の高齢化問題や障害者に対する問題と福祉などについてたくさん学ぶことのできたとても良い機会になった。そして日本人の友達は誰かに頼まれなくても、自ら進んでやることを探し出して黙々と取り組んでいる姿を見て驚いたし、見習いたいと思った。

今回のキャンプを通じて、私たちはお互いに共感できることが多くて、たくさんを一緒にできるということに気が付いた。お互いの国に対して関心を持って理解しようと努めている私たちがいるから、未来はきっと日韓関係が近くて近い隣国になれると思った。これからもたくさんの学生たちがお互いの国について理解し合い尊重し合う時間を持って、未来の日韓は協力し合う隣国になればいいな。

「相対的に見る」



工藤 伯

山形県立山形東高等学校 2年

(Ⅰ) 『日本人である私』

私は韓国に渡り、『日本人』になった。いやいや、もともと日本人だろう。そう言われるかもしれない。だが、そんなことは承知の上である。日本に住んで、日本語を話していればその人は日本人だ。ここで私が定義する『日本人』とは、海外の人から見た私達のことである。その点でいえば、日本での日本人同士の会話に日本人は登場しない。なぜならそこに『日本人』という言葉で差別化する必要性は生じないからである。長々と述べたがつまるところ、海外に赴いたことで私は一人の『日本人』として見られるようになった。ということである。

韓国の学生に、「日本人って〇〇なんでしょう？」と聞かれることが多かった。「人によると思うよ…」と弱々しく返事をする私がそこにいた。いわば私は彼等にとって『日本人学生代表』である。『日本人』という集団で考えられても困るなあ…と思いながらも『日本人』である私は『日本人』として返答したのである。因みに私もこの段落の初めに「韓国の学生」という言葉を用いた。そんなもんである。未知なる相手に対して抽象化するのは万国共通、というかそれ以外仕様がなことは歴史を遡っても垣間見ることができる。

(Ⅱ) 『韓国を見る日本人』

私は一個人としての学びを得るべくこのキャンプに参加し、そこには特に政治的意志は含まれていない。しかし、日韓関係の悪化に伴い私は学生としての経験を積むとともに『日本人』として韓国の街を見ようと心がけた。日本のマスメディアで散見される韓国国民の日本に対するデモ活動、不買運動。日本人ならみなニュースで見たことがあるはずだ。見たことがないというのはあまりに世間に無頓着であり嚴重注意レベルである。

そんなことはさておき、三日目のモールにて、私は敢えて日本人であることをアピールした。一般の人々の目を観察しようと考えたのである（決して褒められたことではないが）。結果としては、特になにもない、その一言に尽きる。日本のマスメディアを信用しすぎてはいけない。私達が見ているものは断片的な事実である。メディアリテラシーという言葉が重くのしかかった。

(Ⅲ) 『海外から見た日本』

強く印象に残ったのは、英語教育。日本での（今は多少制度が変わっているらしいが）中学一年生の学習内容を韓国では小学一年

生から行っているらしい。自国の文化、言語を保存するに当たり英語学習を日本語学習より遅らせることには納得できる。しかし、そのことを踏まえた上でも日本の英語教育は遅れすぎではないか。これは私がどうこう言ってもしかた無い問題であるので議論は広げないことにする。ただ、教育の面では韓国の学生に対し憧憬の念を抱く点が多くあったことだけ述べておく。

やはり日本は『サブカルチャーの国』らしい。聞いたところによると漫画やアニメを通して日本語を学んだ方も多く、自分達が思っている以上にその色は濃かった。このことは想定内といえば想定内であるので特段面白い発見でもなかった。

対して、日本人のクリエイティビティを



見ることができたことは特筆に値する。一つ面白いエピソードがある。夕食にカレーがでた。班員の韓国人学生の一人と日本と韓国のカレーの違いの話をしていたところ、面白い話を聞いた。「日本で食べたカツカレーがおいしかった！」「え！食べたことあるの！」「あれはすごいよ！なんでカレーにカツを乗せたのよ！」うーん、確かに。なんでカツを乗せたんだろう。その他にも彼等は私達が持ってきた日本の食べ物を見て驚きっぱなしだった。日本の想像力ってすごいんだなあ。

自国を見直す好機となったキャンプであった。

